

【エピソード1】 一期一会



「痛い 痛い！ゆっくりやってくださいよ！」
Aさんの苦痛を伴う大きな声を初めて聞いたのは、
手術をして病室に戻ってきた日のことだった。

Aさんと関わる時は大変なんだろうな、正直そう思った。
Aさんは家族も言うほどの「個性の強い人」、
信頼関係が築けたら、お互いに苦じゃなくなるかも。
そんなことを思いながら関わったが、簡単ではなかった。

だけど、日々関わっていく中で、旅行が好きなこと、
たくさん物知りな人であることを知った。
テレビに映る場所をみて「またここに行きたいわー。緑がきれいなんですよ」
と話される姿に、お元気な頃のAさんを想像した。

一進一退の日々、どんな気持ちでこの病気と闘っているんだろう

Aさんの一番の願いは、どんな苦しいときにも、
動けるようになりたいということだった。
「やれるならやりますよ。そんなのわかってるけど…できないんですよ…」
「ほらこっちの手も動かなくなってきたし、とても悔しいんです」

私たちにとっても葛藤の日々だった

退院する日まで 苦痛なく過ごせるようにカンファレンスを重ね、
Aさんの希望に近づくように関わってきた。
「うがいしてから痰とってもらって…あとすみません、耳もかいてください」
「あとリップとスプレー5回、お願いします。あ、ちょっと待ってもらえます？」
「もう一回、はいありがとう」

毎回メニューが違うことに少し戸惑った。
だけどその要望にも、
よし、安楽につながるのなら、心をこめて痰をとろう
そう思えるまでになった。
「みんなよくやってくれているんですよ」「ありがとう」と言いながらも、
感謝の言葉は本当かなと深読みしてしまうくらい、いろいろ訴えてくださった。

なにも言わない患者さんもいるけど、これだけいろいろ言えるってことは、
もしかしたら幸せなことかもしれないし、つらいことかもしれない。
遠慮したくても自分でできない。
そのような状況、自分だったら、とっくにどうにかなっていると思う。
だからこそ、私たちのケアで満足感を得てほしいという思いで関わった。

思えば、私たちは交代してケアに入ることができるけど、
Aさんはたった一人で、私たちの振る舞いを受け止めてくださった。

「また呼びますけど よろしくお願ひします」

そうやって、私たちの気持ちにも配慮しながら、
落ち込んだ自分自身の気持ちを奮い立たせていたのかもしれない。
すごい人だ、強い人だ、ほんとうに。
そんなことを ガランとあいた病室を見つめて考える。

希望を持ち続けること、あきらめないこと。
命をもって大切なことを教えてくださったAさん。
この病棟で生き抜いた日々は、
きっと誰かの看護の原点になったに違いない。
この病棟全体の学びとなったに違いない。
いつまでもこの病棟の記憶に残る宝物となった患者さんに違いない。

まだ脳裏に残る声、
「また呼ぶけどお願いね ありがとう」

私たちの奮闘ぶりを見守っていてくださいね。
たくさん学びをありがとうございました。
今日もまた、病める人が私たちを待っている。
患者さんから、また大切なことを教えていただく。
一期一会を大切にしてください。

おぼろ月夜に Aさんを偲びつつ

